

# 福岡の祭り

アクロス福岡文化誌  
編纂委員会編

海鳥社



# はじめに

アクロス福岡文化誌編纂委員会

先人たちが築いてきた文化遺産や風土——「ふるさとの宝物」を再発見し、後世に伝えていくことを目的に刊行してきた「アクロス福岡文化誌」シリーズも、通算四巻目となりました。

第四巻目は「祭り」というテーマで、県内に伝わる伝統的な祭り、民俗芸能の由来や見所を紹介しています。日本の風土を特徴づける四季の流れはもちろん、旧暦に基づいて行われる祭り・行事が多いことも考慮して「新年」「春」「夏」「秋」と章分けし、最後の「百花繚乱」の章は民俗芸能を中心にまとめています。その枠組みの中で、同じ種類の祭りをまとめて紹介し、比較や分類も行っています。これは、その祭りが持つ本来の意味や特徴をより際立たせ、祭りの背景にある各地域のつながりや文化圏までがうかがえるようなものにするためです。

執筆は様々なかたちで地域の祭りや民俗芸能に関わっている方々にお願ひし、各地の実情を踏まえた内容となっています。また、各地の公共機関や多くの方々から写真・資料をご提供いただきました。関係各位のお力添えに心よりお礼申し上げます。

福岡県内には、本書で取り上げた以外にも、たくさん  
の貴重な祭り、民俗芸能が存在し、それぞれ個別の魅力  
を持っています。また、残念ながら諸事情により消えて  
しまった祭りがある一方で、一度は廃れながらも地域の  
人々の熱意により再興された祭りや、より盛大になり地  
域振興の一翼を担っている祭りも多くあります。

祭りには、地域を一瞬で賑やかな空間に変え、人々を  
晴れやかな気持ちにさせる不思議な力があります。また  
「五穀豊穡」「無病息災」「家内安全」など、豊かな恵み  
や幸せをもたらす祖霊に祈り、感謝を捧げてきた先人た  
ちの思いが脈々と受け継がれています。祭りはまさに、  
自然やふるさと、祖先や神仏を敬う日本の心を映し出す  
“鏡”、地域文化の象徴なのです。本書が、そのような日  
本の心や地域文化を後世に伝える一助となることを願っ  
ています。



はじめに 2

【総説】福岡県の祭りと民俗芸能 6

## 新年——新春を寿ぐ

玉せせり 玉の靈威で運を開く 24

修正会 前年の罪を悔い改め、新年の吉祥を祈る 28

恵比須祭り 富と幸福をもたらす来訪神を祀る 34

小正月行事 古い祭事の姿を今に伝える 38

百手 的に矢を射て、その年の吉凶を占う 42

## 春——豊穣を願う

松ばやし 新しい年を祝う賑やかな行列 48

粥占 粥に生えたカビで豊凶を占う 50

お田植祭り 稲作りの所作を演じ、豊作を祈る 54

衆打ち 太鼓を打ち鳴らし、災厄退散を祈願する 58

## 夏——魂の躍動

祇園・山笠 豪奢なヤマが町を彩る 64

豊前の祇園祭り 各地に伝わる多彩なヤマ 72

大蛇山 見る者を圧倒する、火を吐く大蛇 78

夏の厄除け・水難除け 健康と安全を祈る 80





盆踊り 音曲と踊りで祖霊を迎え送る 84

盆綱 先祖の霊を地獄から引き上げる 88

施餓鬼 非業の死を遂げた人々を供養する 92

## 秋 — 収穫の喜び

八朔のお節供 稲の成長、子供の成長を祈る 96

宮座 失われつつある祭りの原点 100

風流 太鼓・鉦を打ち、歌い踊り、収穫に感謝する 104

放生会 万物の生命を慈しみ、殺生を戒める 108

秋の神幸 御祭神が守護する地域を巡る 112

## 百花繚乱 — ふるさとに舞う

神楽 神と人とを結ぶ、祈りの舞 118

獅子舞 力強い舞で悪霊を祓う 124

人形芝居 伝統の技が凝縮された人形浄瑠璃 130

舞台芸能 現代に具現される中世世界 134

海の祭り 恵みの海に感謝する 138

歌う祭り 祈りを込めて高らかに歌い上げる 142

より詳しく知るための参考文献案内 巻末1

福岡県の祭り暦 巻末3



# 玉せせり

「たませせり」

玉の霊威で運を開く

## 玉を奪い合い、吉凶を占う

福岡市東区箱崎・宮崎宮の正月三日の祭礼である玉取祭たまとりさいは、玉せせりという名で広く知られる。「せせる」とは、繰り返し触れる、探り求める、弄ぶもてあそといった意味で、下帯一つの競り子が木製の玉を争奪し合い、またその結果をもって一年の吉凶を占うとするところから、いわゆる押し合い祭り、裸祭りの典型として紹介されることも多い。その由来については、すでに江戸時代から諸説あつて定かではないが、江戸中期以前には現行とほぼ同様の行事があつたものと見られる。

箱崎の玉せせりは、一月三日午後一

時の玉洗式が始まる。直径三〇センチ、重さ一一キロと、同二八センチ、八キロの陰陽二つの木玉を、絵馬殿前で薬くすりのたわしを使つて洗い清め、たつぷりの白絞油しろよめを注ぎ紙で拭き上げる。これが終わると、玉は一の鳥居から二〇〇メートルほど離れた玉取恵比須神社へ運ばれる。そこで玉取祭の祭典が執り行われ、二つのうち陽の玉が社前に待ち構える子供に手渡される。玉に群がる子供たちは、大人に肩車されて玉を受け、高々とそれを掲げては次の者に渡していく。大人の待ち構える宮崎宮横交差点付近までのおよそ一五〇メートルを、子供がせせることになつてい

る。

続く大人の玉せせりは、境内楼門中で待ち構える神職に誰が玉を納めるかが最大の関心事で、箱崎、馬出まいでの青壮年が、ここでもまた肩車をしながら、周囲から浴びせ掛けられる水しぶきの中で激しく玉を奪い合う（本章扉写真参照）。玉に触れると幸運を授かり、また最後に玉を納めた競り子が浜方ならば豊漁、陸方おかたならば豊作に恵まれるという。

箱崎の玉せせりと同系の行事は、博多湾周辺をはじめとする福岡県玄界灘沿岸のごく限られた地域に分布する。そこには玉に接する人々の態度に、取り合おうとするものと運び回ろうとす





姪浜の玉せり（福岡市博物館提供）。激しく競り合いながら、住吉神社まで約1キロの道のりを移動していく

るものの二つの形式があつて、その組み合わせによつて行事の性格はやや異なるものになっている。

姪浜の玉せり（福岡市西区姪の浜）は、筥崎宮と同じ一月三日午後一時に始まる。直径二五センチほどの木製の玉が住吉神社から漁港にある事代神社へと運ばれ、そこで玉競祭の祭

典と玉洗いが行われる。玉を受けた下帯姿の男たちは、まずそれを海に放り込み、それから住吉神社までの一キロほどの道のりを、辻々で幾度も激しく競り合いながら移動していく。神社に到着すると、拝殿前に設置された壇上へ玉を押し上げ、神前に奉納して玉せりを終える。行事の過程は箱崎とよく似るが、子供は参加せず、また担い手の大部分が漁業者であるため、農と漁の対抗がなく、年の吉凶を占う勝負の感覚は薄い。

### 家々が玉をお迎えする

福岡の玉せり（福岡市西福岡）は、一月三日午前十時から行われる。南区、緑区の青年が、直径三一センチ、重さ一一キロの木玉を抱え、港から約三キロ離れた宮地嶽神社に参拝し、漁港に戻って波打ち際で玉を競り合う。福岡では区ごとに玉を所持していて、それ

福岡の玉せり（福岡市博物館提供）。玄界灘の波打ち際で玉を競り合う





上：伊崎の玉せせり（福岡市中央区）。玉を担いで家々を回り、迎えた家では玉に神酒をかける

右：弘の玉やれ（福岡市東区）では、玉を神棚に捧げ拝む

左：今宿の玉せせり（福岡市西区）。赤禪姿の子供たちが、玉を抱えて町内の家々を回る（以上3点、福岡市博物館提供）



もまた同様に競る。これは奪い合うというより、皆で玉に触れて掲げ上げるように見える。玉せりが終わると区ごとに公民館に向かうが、その途中も辻々で玉を競って「祝いめでた」を歌う。玉せりは従来十一日の行事で、海岸で玉を競った後は、家々の荒神棚に玉を供えて回るものだったという。辻での玉せりは箱崎や姪浜に似るものの、行事全体としては家々に玉を運び回ろうとする動きが本来重視されていたことがうかがい知れる。

これに似たものに伊崎の玉せせり（福岡市中央区福浜）がある。恵比須神社の十日恵比須の行事で、漁協組合員や子供たちが直径三五センチの木の玉を担いで福浜、伊崎、唐人町一帯の家々を回る。迎える家では、玉を受け取ると神棚に突き当てて神酒を注ぎかける。町を回り終えた一行は、玉を海に放り込み海中でしばらく競り合った後、再び恵比須神社に納め行事が終わ

る。かつては若者組と子供組に分かれ、二つの玉を競り合っていたという。

子供が行事の主たる担い手である場合、玉を運び回る形式がとられることが多い。その一つ、弘の玉やれ（福岡市東区弘）は一月三日九時から行われる。締め込み姿の子供たちが浜に降りて水際の砂を取り、恵比須神社に納める。そうして玉を受けると、「玉やれ、玉やれ」と言いながら家々を回り始める。迎える方では、玉を受け取ると荒神（神棚）に捧げ拝むことになっている。

町場でもこうした玉せせりは行われていて、今宿の玉せせり（福岡市西区今宿）は、一月三日の朝、二宮神社での祭典の後に赤い禪姿の子供たちが神社下の海岸で玉を洗い、「セーセッタ、セーセッタ」の掛け声とともに玉を持って町内の家々を回る。また、明治時代には廃絶したが、博多の町の多くには一月三日の玉せせりがあつて、玉を





持った子供たちがお金や餅などをもらいながら町中を回っていたし、糟屋郡宇美町でも同様の行事が行われていたという。

### 海から現れる恵比須神

ここまで挙げた例の多くで、玉せせりの開始される場所が恵比須を祀る神社であり、また波打ち際であることは、玉に仮託された霊威が、新たな年に海から招き上げた恵比須神であることを示している。一月二日に行われる新宮の玉せり（糟屋郡新宮町新宮）で、子供や青年が海から砂（潮井）を取って境内にある恵比須堂に入り、その砂を互いに掛け合った後、合図とともに参道に盛られた砂の中から石の玉を取り出し競り合うのは、そうした考え方をよく表している。

一月十日の脇之浦の裸祭り（北九州市若松区小竹）では、男たちが海から

石を抱え上げ恵比須神社に奉納するが、このように石を恵比須として祀る習俗は、福岡のみならず九州西岸に広く見られる。玉せせりは、そうした要素が玄界灘沿岸で独自の発達を遂げ、祭礼化した恵比須信仰の一つのかたちであるといえるだろう。

〔松村利規〕



新宮の玉せり（福岡市博物館提供）。海の砂（潮井）を境内に運び、それを掛け合った後に石の玉を競り合う

執筆者一覧

森 弘子（福岡県文化財保護審議会専門委員）  
松村利規（福岡市博物館）  
白川琢磨（福岡大学人文学部教授）  
竹川克幸（西日本新聞天神文化サークル講師）  
久野隆志（福岡県教育庁総務部文化財保護課）  
吉田修作（福岡女学院大学人文学部教授）  
亀崎敦司（九州大学大学院人間環境学府）  
山口正博（香蘭女子短期大学講師）  
段上達雄（別府大学文学部教授）  
福岡裕爾（福岡市博物館）  
佐々木哲哉（元福岡県文化財保護審議会委員）  
香月靖晴（嘉飯山郷土研究会会長）  
河口綾香（福岡大学文化人類学研究室研究員）  
長谷川清之（桂川町教育委員会）  
宮崎由季（元太宰府天満宮文化研究所）  
村田眞理（元太宰府天満宮文化研究所）

アクロス福岡文化誌編纂委員会

会 長	武野要子（福岡大学名誉教授）
副 会 長	西表 宏（香蘭女子短期大学教授）
監 事	堀 秀行（福岡県新社会推進部県民文化スポーツ課）
委 員	飯田昌生（元テレビ西日本・VSQプロデューサー）
	池邊元明（福岡県教育庁総務部文化財保護課）
	加藤哲也（株式会社財界九州社編集委員）
	河村哲夫（福岡県文化団体連合会専務理事）
	木下陽一（写真家）
	嶋村初吉（西日本新聞社編集局）
専門調査員	竹川克幸（西日本新聞天神文化サークル講師）
事務局 長	池田博昭（財団法人アクロス福岡事業部長）
事 務 局	坂本いより（財団法人アクロス福岡）
	福浦直美（同右）





アクロス福岡文化誌 4

福岡の祭り



2010年3月20日 第1刷発行



編 者 アクロス福岡文化誌編集委員会



発行所 アクロス福岡文化誌編集委員会

〒810-0001 福岡市中央区天神1丁目1番1号

電話092(725)9115 FAX092(725)9102

<http://www.acros.or.jp>

発売 有限会社海鳥社

〒810-0072 福岡市中央区長浜3丁目1番16号

電話092(771)0132 FAX092(771)2546

印刷・製本 大村印刷株式会社

ISBN 978-4-87415-761-9

<http://www.kaichosha-f.co.jp>

[定価は表紙カバーに表示]